

とよたけ 豊竹 呂勢太夫さん

義太夫節太夫(文楽座)※

さまざまなジャンルで活躍する邦楽演奏家にスポットをあてて、邦楽の魅力をお伺いするシリーズです。

※義太夫節：浄瑠璃(三味線音楽における語り物の総称の一派。人形芝居の音楽として17世紀後半に成立し、人形浄瑠璃文楽の音楽として、広く親しまれてきた。



豊竹 呂勢太夫
とよたけ ろせたゆう

1965年東京都生まれ。'79年四世鶴澤重造に師事。'84年五世竹本南部太夫に入門。竹本南寿太夫と名乗る。同年国立文楽劇場にて初舞台。'85年五世豊竹呂太夫の門下となる。'88年豊竹呂勢太夫と改名。2000年八世豊竹嶋太夫の門下となる。'03年大阪舞台芸術奨励賞、文楽協会賞、国立劇場文楽賞ほか、受賞多数。

◆義太夫との出会いは

小学校のころ、NHKで放送されていた人形劇の「新八犬伝」が大好きでよく観ていました。人形劇というものが好きでした。劇中の音楽は三味線の一種で太棹というのよ、と母が教えてくれたのも覚えています。祖父母が歌舞伎好き、母も日本舞踊のお稽古、と日本の芸能に通じた家庭環境だったと思います。そして8歳の時初めて文楽に連れて行ってもらいました。演目は「加賀見山田錦絵」。そこでハマってしまっただけでなく、「三番叟」の曲がいいなあと、思っ、帰りにレコード屋に寄ってレコードを買ってもらい家で聴いていました。そのうち、三味線をやってみたくなったのが始まりです。

◆小学生にして義太夫の世界ですか！

祖母の知り合いを通じて国立劇場で文楽の後継者を育成する養成課の方を紹介されました。先代の豊竹呂太夫師匠に初めてお会いしたのはその時です。義太夫をやるならはじめは地歌がいいと父の転勤先、富山市でまず地歌の先生に習い始めました。その後中学2年で帰京した後は文楽の三味線弾きの鶴澤重造師匠の下で三味線と語りの両方を教えていただきました。テープや譜面などを使わないで、師匠が1回やってくれて2回目と一緒に、3回目は一人で、という昔風の稽古。対面で師匠の真似をして覚える方法でした。

◆その後は竹本南部太夫師匠に、先代の呂太夫師匠、そして豊竹嶋太夫師匠に師事されますね。

その後、いいなと思った太夫の道を選びました。いろいろな師匠に稽古していただいて、芸への異なる取り組み方、表現方

法を教えられました。自分が良いと思っ、やっていたことを全否定されることもあり。しかし言い方は違っても表現しようとしていることは同じとか、全く別のやり方を教えていただくとか本当に勉強になりました。

◆職業としての義太夫節の太夫

そんな毎日でしたので、この道に進むのはごく自然なことでした。ただこれまでは目の前のハードルを越えていくことに精一杯でしたが、最近では義太夫の本当の難しさを身に染みて感じるようになりました。技術のマスターは基本ですが、そこにある情感、語る内容の深

◆最後に義太夫の楽しみ方を。

例えば、オペラを楽しむのと同様に、もし言葉が分からなくても心に入ってくる情感、感動をそのまま楽しんでいただけばうれしいです。そして1回でなく何度も何度も聴くときっとハマると思います！



16歳、鶴澤重造師匠のお宅での稽古

5月11日(土)~27日(月)

5月文楽公演

「通し狂言 妹背山婦女庭訓」於 国立劇場 小劇場

5月29日(水) 14:00

「出世景清 素浄瑠璃公演」於 紀尾井小ホール

▶3ページに関連記事あり

演奏会予定